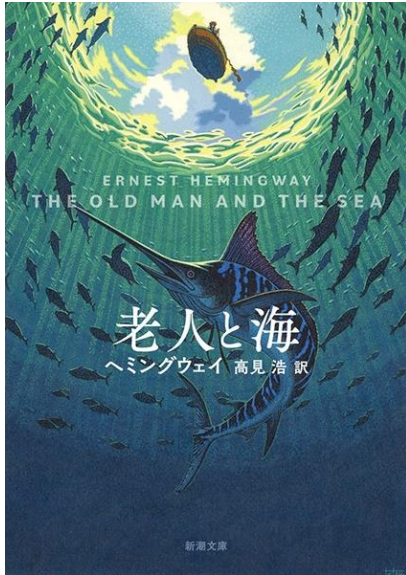


東大寺学園第 4 次文藝同好会

# 2021 年度活動報告

## 読書会レポ 「老人と海」

河島龍之介



八十四日間の不漁に見舞われた老漁師は、自らを慕う少年に見送られ、ひとり小舟で海へ出た。やがてその釣綱に、大物の手応えが。見たこともない巨大カジキとの死闘を繰り広げた老人に、海はさらなる試練を課すのだが――。自然の脅威と峻厳さに翻弄されながらも、決して屈することのない人間の精神を円熟の筆で描き切る。著者にノーベル文学賞をもたらした文学的到達点にして、永遠の傑作。

(画像・あらすじ共に新潮社ホームページより)

2021年2月18日、私(河島)が入会してから初めての読書会を行った。題材はアーネスト・ヘミングウェイ作「老人と海」だった(上の写真は新潮文庫新版の高見浩訳。私(河島)はこれ以外にも光文社古典新訳文庫(小川高義訳)、新潮文庫旧版(福田恒存訳)も読んだ。特に新潮文庫旧版は最近まで長く発行され続けていたのでこれを読んだことがある方が多いかもしれない)。

教室に入ると、文藝同好会員以外の生徒もいた(そのうちの一人は、私の持ってきた「老人と海」を15分ほどで超飛ばし読みをしていた。彼は読書会には参加していない)。どこから話をしようか、と言いながら与太話をしているうちに30分ぐらい経った。その頃には他の生徒は出ていっていた。

※この記事にはネタバレが含まれます。また、「老人と海」をお読みになっていない方には分かりにくいと思われますがご容赦ください。

とりあえず黒板に「冒頭」「カジキ」「サメ」「帰ってきた後」と書いた。その後加速度的に話は弾んでいった。

この本はせいぜい150ページほどの短い本である。逆にいうと、一つ一つの描写が大切になってくる。

まずはカジキが老人の何かを象徴しているのではないか、という話になった。そこで、老人を一旦二つの側面に分けて捉えよう、と君野が言った。「漁師としての老人」と「人間としての老人」(本当は読書会の中ではずっと「老人としての老人」という意味不明な語を使っていたのだが……)。

やつはおれの兄弟分だ。(新潮文庫旧版、福田恒存訳、65 ページ)

この老人の独り言が示すように、当然ながら、カジキはただの獲物ではない。それでは、カジキが表している特別な意味とは何なのか。君野が言った。「カジキは漁師としての老人の存在理由なんじゃないか」

私たちは別の話題に移った。次は「海」についてである。

海のことを考えるばあい、老人はいつもラ・マルという言葉を思いうかべた。それは、愛情をこめて海を呼ぶときに、この地方の人々が口にするスペイン語だった。海を愛するものも、ときにはそれを悪しざまにののしることもある。が、そのときすら、海が女性であるという感じはかれらの語調から失われたためしがない。もっとも、若い漁師たちのあるもの、釣綱につける浮きの代わりにブイを使ったり、鮫の肝臓で大もうけした金でモーターボートを買いかんざりする連中は、海をエル・マルというふうに男性あつかいしている。(前掲書 29～30 ページ)

この部分に現れているように、老人や漁師仲間は必ず海を女性名詞扱いしている。そこで小碓が「海」は一般的にはスペイン語では男性名詞なのだと教えてくれた。この小説の舞台はスペインではなくキューバであり、1950 年代にはキューバで一般的にどの性の名詞の扱いをしていたかはわからないが、一般的には男性名詞なのだとすると、これはとても興味深い。また、上に引用した部分のすぐ後に、老人は海は女性のような存在で恵みを与えてくれるが、ときにはお預けにすることもあると考えているという記述もある。

私(河島)はこのことについて、海を男性名詞と考える者(若い漁師たちのあるもの、釣綱につける浮きの代わりにブイを使ったり、鮫の肝臓で大もうけした金でモーターボートを買いかんざりする連中)は海を金儲けのための、代わりがきく存在と考えているのではないか、と思った。このようなことを「冒頭」と書いた下書きに書き込んだ。

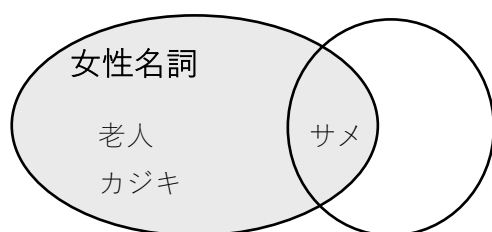
また、カジキとサメの違いについても議論された。私(河島)はもし老人の針に最初にかかって獲れたのがサメだったとしたら(老人の針で釣れるのかは知らないが)、老人はサメを釣果としてそのまま帰っていただろう、と言った。サメもカジキも海の一部である。それなのになぜ老人はカジキを守ろうとするのだろうか。そして、そのために必死になってサメととことん格闘するのだろうか。

カジキは海の「恵み」で、サメは海の「お預けにする」存在と考えればよいのだろうか。しかし、老人にとってはそんなことよりもカジキに対してものすごい執着を持っている。ここで、「漁師としての老人」と「人間としての老人」という考え方が出てくる。

老人は、最初のサメが襲ってきた時点でカジキがサメに食い尽くされることを防ぐ術がないことを、頭の片隅で理解したのだろう。それでも、老人は何回も戦って数匹のサメを殺している。老人にとっては、いずれサメに全部食われてしまうのであればカジキは諦めて舟から切り離し、さっさと帰るのが経済効率的には一番よい。それでも、カジキが骨と頭だけになろうとも、老人はサメととことんまで戦ったうえで港までカジキを持って帰るのである。それは、「漁師としての老人」が捕らえた一生で一番大きいカジキだからだろう。でも、なぜ「兄弟分」なのだろう。

「兄弟」という言葉が示すように、カジキは老人自身ではない。しかし、老人はカジキを殺した直後には頭が混乱して、自分がカジキを曳いているのか、あるいはその逆なのか、とさえ考えている。カジキに「漁師としての老人」を重ね合わせる見方は、妥当なものといえよう。また、君野は「漁師としての老人」の存在理由なのではないか、というようなことを言っていた。私はカジキが不漁の間眠っていた「漁師としての自分」を呼び覚ましてくれた存在であったのではないか、と言った。

しかし、話が進むにつれて、サメとカジキを対置させる見方よりもむしろ、老人がサメとカジキの違いを自分の中で勝手に作っているだけなのではないか、という見方をす

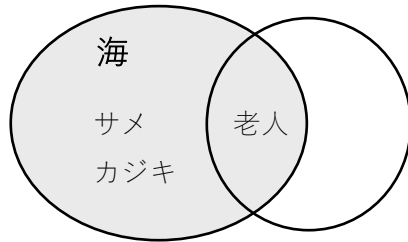


るようになった。最初、私は老人とカジキは「女性名詞」側にいて、サメは女性名詞的な側面と男性名詞的な側面の両方を持っているのではないか、ということをつづら。しかし、君野の考えは違った。「僕はむしろ、このサメと老人が逆なんじゃないかと思う」

実は、老人とて、海を完全に女性とばかり捉えるわけにもいかず、その境界にいると考えた方がよいのではないか。この見方には鋭いな、と思い素直に感心した。

老人には重要なパートナーがいる。少年だ。少年は漁について「何匹獲れた」「大きいのが獲れた」ということばかり気にして、いわば男性名詞的視点に立っているのではないだろうか、という話になった。しかし、老人は何回も何回も「少年がいてくれたらなあ」と漁の最中に呟く。これは「人間としての老人」が顔を覗かせている瞬間なのではないだろうか、と楠木が言った。老人も最後には陸へ帰ってきて、他愛もない話や追想にふける生活に、つまり「人間としての老人」に戻るのだ。ずっと「漁師としての老人」で居続けることはできない——もっとも、ずっと「人間としての老人」でいたらすぐに毫碌してしまいそうではあるが——ということは、つまり、老人の意思とは関係ないことではあるが、どこかで「人間としての老人」に向かっていこうとする力のようなものがあるのではないか、と私は言った。老人は海へと向かう衝動（漁師としての老人への衝動）と陸へと向かわなければならな

い（人間としての老人へ戻らなければならない）ことの板挟みになっているのではないだろう



うか。また、「少年がいたらなあ」というときに「人間としての老人」が顔を覗かせるように、漁をしている時の老人もまた完全な「漁師としての老人」ではないのである。

また、冒頭（漁に出るまでのシーン）では以前老人と少年は 87 日連続の不漁が続いた後に 3 週間ぐらいたくさんの魚が獲れたことがあったという挿話がある。これも海は老人の手に余るものであることを証明するエピソードだ（そこが海を女性とたとえる所以なのかもしれない）。最終的には、やはり老人と海は相容れない存在なのではないだろうか。

そして、最後には老人がライオンの夢を見るところで小説は終わる。ライオンの夢が象徴するものは一体何なのだろう。

ライオンは海と対比されているのではないかと君野が言う。ライオンは老人が若い頃のことを回想しているのである。これは、「人間としての老人」を表しているのだと読むと、カジキ、サメとの格闘を通じて「漁師としての老人」には決着をつけていたのではないかと、というようにも思えてくる。また、少年にカジキの頭を渡すこともそのことを表していて、少年に「漁師としての老人」が継承されていくことを表しているのではないだろうか。そして、「漁師としての老人」にけじめをつけたと言うことは、これからの老人は「新しい老人」（これも非常におかしな単語だが）になってゆくのかもしれない。

また、「漁師としての老人」の海への思いは「人間としての老人」の少年への思いと似たところがある、と誰かが言った。そして、「漁師としての老人」と「人間としての老人」は一見相容れないもののように見えるが、どちらも「老人」であり、重なっているのだ。そして、これからは「新しい老人」へと変化するのである。

「そう考えると、」楠木が指摘する。老人はライオンの夢を小説全体で 3 回見ているのだが、それぞれ、若かりし頃の老人の内面に「漁師としての老人」を芽生えさせ、カジキと戦いながら「漁師としての老人」の中に「老人としての老人」を垣間見せ、そして「漁師としての老人」の幕を閉じる役割を果たしていることになる。つまり、「ライオンの夢」が老人の二面性に橋を架ける存在となっていると考えられるのだ、と。

このように、「老人と海」にはたくさんのモチーフが隠されていて、話が弾んだのだった。有意義な時間を過ごすことができ、私の初めての読書会は、与太話が少々多すぎるくらいはあったが概ねよいものになったと思う。ただ、途中のメカジキの雌を老人と少年が捕らえ

てその雌とくっついていた雄が最後に飛び跳ねて雌の運命を見定めるとそのまま海の中に姿を消していったという挿話や、新版と旧版での日本語訳の相違など、もう少し議論を重ねたい箇所もあったと言えるのも確かではある。

何はともあれ、これだけ議論を深めることができたのだから、大変有意義な時間を過ごすことができた。一緒に参加してくれた会員の皆さん、ありがとうございました。